

Q3-12. 放流孔（5 m × 5 m）より大きな仮排水路トンネル（直径約 10 m）が閉塞していますが、放流孔は詰まらないのでしょうか。

- 熊本地震後の出水により、施工中の仮排水路トンネルの上流側の内部が土砂で覆われました。（写真－1）
- これは、仮排水路トンネルの途中にコンクリートを打設するため仮設置していた型枠（セントル）がトンネル断面の大部分を塞いでいたため、土砂をせき止めたことが原因であると考えられます。（図－1、2、写真－2、3）
- ダム完成後、放流孔には型枠（セントル）のようなものは設置されませんので、熊本地震後に仮排水路トンネルが途中まで土砂で覆われたことをもって、ダムの放流孔が閉塞すると考えることは適当ではありません。
- また、放流孔の呑口部のスクリーンは、流木が放流孔内に固定化されて放流孔が閉塞することを防止するために設置するものであり、流木を捕捉する前提でスクリーンは設計されています。
- 当然ですがスクリーンで流木を捕捉することで、放流孔内に流木が固定化されるような閉塞は起こりませんし（図－3）、一番下の放流孔はスクリーンの前面底部が空いており、砂礫等が通過するため、洪水調節能力が失われるようなことはありません。（写真－4）



写真-1 仮排水路トンネルの土砂堆積状況



写真-2 型枠の設置状況（地震前）



写真-3 仮排水路トンネルの状況（地震前）

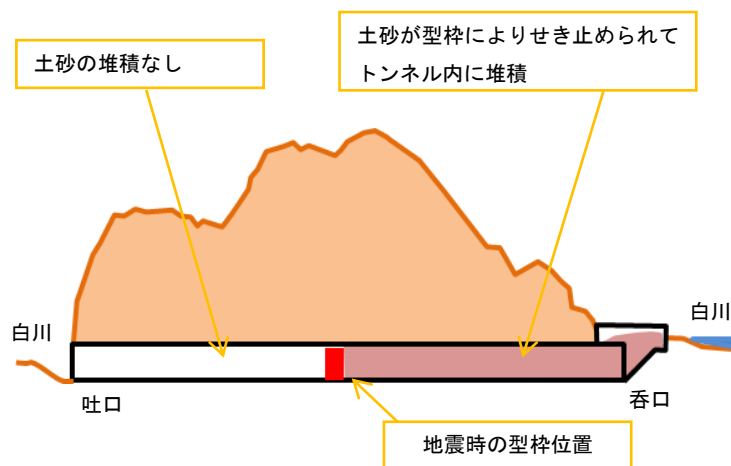
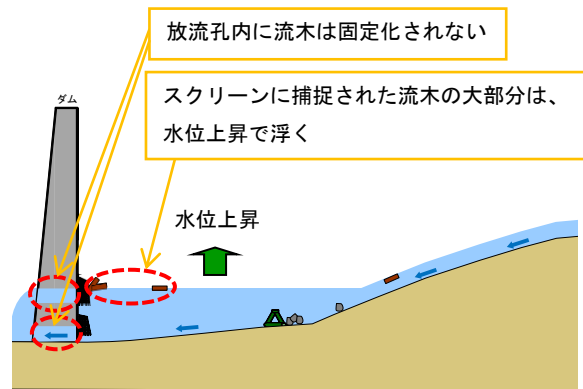


図-1 仮排水路トンネルの縦断イメージ



図-2 仮排水路トンネルの施工位置



水位が上昇すると流木も浮きますが放流する穴にはスクリーンを設置しており、流木はスクリーンに捕捉されます。

図－３ 流木等の捕捉イメージ



写真－４ 立野ダムのスクリーン